学 位 論 文 要 旨

氏 名 小林久美子

題 目 藤田嗣治を主軸に据えた「戦争画」の鑑賞授業に関する研究

学位論文要旨（和文2,000字又は英文1,000語程度）

第二次世界大戦前・中期には多くの従軍画家によって「戦争画」が描かれているが、戦後60年を経ても「戦争画」はほとんど公開されず、十分な解明もなされてこなかった。戦後70年辺りから、公開される機会も徐々に増えてはきているが、実物を鑑賞した人はまだまだ限られており、美術科や社会科の教科書にも「戦争画」は掲載されていない。「戦争画」の歴史的意義や芸術性を次世代の子供たちに語り継がなければならないと考え、中学3年生を対象とした「戦争画」鑑賞授業を実践してきた。本研究ではそれらの授業実践を考察対象とし、戦争画の美術教育上の意義を明らかにするとともに、戦争画鑑賞プログラムの構築を試みた。

本研究では戦争画を描いた画家のなかでも、藤田嗣治に着目した。藤田は戦前パリで「乳白色の肌」で一躍有名になった画家であるが、「戦争画」を誰よりも多く描いている。中でも《アツ島玉砕の図》は人物の細部の表現とその後方の荒れ狂う波との相互関係や、山崎大佐を頂点とした安定した三角形の構図、また、細部に至っては折り重なる屍とその横にアツ島の花が描かれているなど、大胆でありながら細部にまで神経が行き届いており、林洋子が述べているように「芸術的価値の高い戦争画」である。本研究では《アツ島玉砕の図》を起点とした5つの授業を取り上げ考察している。

本研究の具体的な目的は次のとおりである。第1に、「戦争画」を分類し定義づけるとともに、とりわけ第二次世界大戦における「戦争画」の実態を把握し、歴史的意義を考察する。第2に、藤田嗣治の生涯における「戦争画」の意味を考察するとともに、日本美術史における位置付けを行う。第3に、藤田嗣治の「戦争画」、《アツ島玉砕の図》と丸木位里・俊の《沖縄戦の図》の比較、また戦時中の藤田と立ち位置の異なる画家（鬚光や無言館展示作品）との比較を中心とした、中学生対象の鑑賞授業を行い、戦時中の絵画の社会的位置や芸術的価値を感じ取りながら、現代に生きる自分たちに課せられた課題に気付く力を養成する。第4に、戦争画の考察及び授業分析の結果を基に、中学校美術科における、3か年を通した「戦争画」鑑賞授業プログラムを構築する。

第1章では戦争の歴史と芸術的価値について論述した。第1節で日本の戦争画の変容とその時代の芸術的な価値について、第2節では第二次世界大戦期に描かれた「戦争画」を‘題材’及び‘時代’からの分類を試みた。また、従軍画家たちの「戦争画」と戦後の活動について論述した。

第2章では、藤田嗣治の生涯と「戦争画」について考察した。

藤田の生涯は4つの時期に分類される。(1)東京美術学校西洋画卒業～フランス～イギリス～フランス (1910～1928) (2)世界大恐慌～日本～フランス～アメリカ～中南米 (1929～1933) ,(3)日本～フランス～日本 (1934～1948) ,(4)アメリカ～フランス～スイス (1949～1968) である。各時期の藤田の生活や社会的な立場、代表作品について検討した。

第3章では、5つの「戦争画」鑑賞授業の実践を取り上げ考察した。藤田嗣治の「戦争画」鑑賞授業を行うためには入念な準備と計画が必要となる。しかし、戦争画に関する中学生向けの資料がないため、資料作りからはじめた。第1節では「戦争画」鑑賞授業の概略を述べた上で、実際の授業で使用する授業資料を示した。

第2節では藤田嗣治の「戦争画」《ハルハ河畔の戦闘》と《アツツ島玉砕の図》の比較鑑賞授業の考察を行った。生徒の授業後の感想では、作者の側に立った意見、作中に描かれた人たちの苦しみや気持ちに寄り添った感想、また当時の社会情勢や軍の動き、現代日本との違いや共通点などにも言及した感想が見られた。

第3節は藤田嗣治《アツツ島玉砕の図》と丸木位里・俊《沖縄戦の図》の比較鑑賞授業について考察した。《沖縄戦の図》については、修学旅行で佐喜真美術館を訪れ、美術館館長の佐喜真道夫のギャラリートークで鑑賞を深めている。《アツツ島玉砕の図》と比較するなかで、より鮮明に画家の意図を理解し、当時の国民の複雑な心情に対しても想像力を働かせることができた。「戦争画」と「反戦画」との比較授業の効果と可能性が確認できた。

第4節では藤田嗣治「戦争画」と立ち位置の違う画家の作品との比較鑑賞授業の考察を行った。藤田《アツツ島玉砕の図》、鬘光《眼のある風景》、長野県の「無言館」に展示されている戦没画学生作品を用い、多角的な視点から「戦争画」を捉えさせることにより、それぞれの画家の心情を想像し、自分たちの生き方と重ね合わせて考えようとする生徒の様子が確認できた。

第5節では、藤田嗣治の「自画像」鑑賞授業の考察を行った。藤田の生涯を大きく4つの時期に分け、それぞれの時期に描かれた「自画像」を辿ることにより、藤田の製作姿勢や考え方の変化を捉えさせた。社会の変化や要請、周囲との関係などが画家の制作と無縁ではないこと、それぞれの時期に応じて藤田が誠実かつ真摯に制作に取り組んできたことを生徒達は受け止めることができおり、自画像を通じた鑑賞学習の可能性と効果を確認することができた。

第6節では、男性画家の「戦争画」と女性画家の「戦争画」の比較鑑賞授業について考察した。授業では、女性画家の作品鑑賞を通して、戦争という有事の中での女性の役割、銃後の生活を想像させた。女性の立場から戦争画をとらえさせることで、現代と戦中との女性の社会的な立場などへも考えを深めさせることができた。なお、本授業では対話型鑑賞を取り入れることで、意見の共有化や自分なりの意味や価値の生成をサポートするようにした。

第4章では、これまで取り上げた戦争画鑑賞授業を一連の「戦争画」鑑賞プログラムとして整理するとともに、今後の課題について述べた。「戦争画」や「あいちトリエンナーレ2019」で話題となった作品などは、作者の意図とは離れて社会的・政治的な文脈から判断されることがある。現代においても「表現の自由」の危うさは「戦争画」当時の表現にまつわる状況と繋がっており、情報の操作という点から見ると現代の方が一層複雑な状況になっているのではないだろうか。これからの社会を生きる生徒たちには、美術を通して社会を見つめることができる力を養っていく必要があるのではないだろうか。